
暗転と

石葉竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗転と

【Nコード】

N4728L

【作者名】

石葉竜

【あらすじ】

主人公「僕」の数奇な人生を内面から描かれた作品。

回天

家にあるこの時計、決して進むことは無い。

十二時に達することが出来ない様だ。僕が生まれる以前よりずっと

秒針は鼓動一つならしていないらしい。あと二秒だけ、、、

そう、あと二秒だけ、、、

あと二秒鼓動を刻んでいれば十二時を知らせる歓喜の歌を流せるはずだった。

この停止した時計と僕の人生とどこに共通点があるのか？
自分でも分からないが書いていくことにする。

書くことによつて自分を保っていられる唯一の術だからである。

幾度となく気が触れそうになっては発狂、暴言、最後には放心状態の繰り返しだった。

母はそれでも、僕に愛情があつたのか見捨てないで見守ってくれていたが、僕は邪険にしていた。

何故だろう。何もかも亡失出来れば良いのに、、、
親父は外で女をつくり、母と僕に散々暴力を重ねたすえにこの家を飛び出し、離婚はしたものの

母と僕にギャンブルで失敗した多額の借金をプレゼントしてくれた。

それは、今から十年前の暑い真夏の夜の出来事。

記憶が確かならば十年前の夏以来、僕は毎日のように二、三ヶ月は暴れていた。

部屋の床には粉々になった窓ガラスの破片、破られたままの本の

切れ端、Ｔシャツ

壁には半狂乱になりながら開けた無数の穴、とにかく部屋にある全ての物に抑えられない衝動をぶつけていた。唯一、時計には何もなかった。壊れていたから、、、

その時計を見た日から僕は静かになり、光放っていた全てが暗転し始めた。

天涯

今までの生きてきた中で、どれほどの「あと2秒だけ」があっただろう。

2秒というのはアツという間の時間。しかし、僕はその2秒を気にも留めず保留の時間とすることに より、耐える事をせず時の流れに身を任せて生きてきた。 今でもそうだ。

何事も起こらない、淡々とした日を連続させて生きてきた僕はもう30才、、、
責任から逃げ続けている大人と言う着ぐるみを着た子供だ。 きっとこの先、2秒と言う時間を保留していくだろう。 暗闇に彷徨い、茨の地面を這いつくばって死んだように生きて行くだけなのかもしれない。 何も無い、探さない、得ようとしない、僕はこの時計と一緒に孤独なのだ。 逃れることが出来ない孤独に僕は耐えることができるのか？

この問いかけに、空の果てから降り注ぐ孤独が「それでも生きよ、人間を真つ当しろ。」と応えてくれている気がした。 それは、孤独を受け入れた上で妥協して生きていけと、、、 人が人であるが故に、人として生きて、出会い、別れ、貧乏、富豪、恨み、嫉み、孤独をかかえなければならぬ。

しかし、僕はその孤独を未だ全て受け入れられていない。

慨世

目に映る現実、それは虚構であり全て偽りで飾られている。人は目に見えぬ真実こそ恐怖を感じる生き物なのだ。人は真実を曲げて生きている。僕には真実なんて必要としないし曲げる事もない。強いて言うのであれば、孤独こそ僕の真実だろう。

二十歳以来、自分自身を見失っていた僕は、毎日、毎日心を磨り減らしていた。喜びを感じる事もなく怒りを覚える事もなく、ただこの空間の時間を運んでいるだけで、出来ることならもう運びたくは無いと思った。なぜなら、僕の時計も二秒にまだ達していない。鼓動が停止した瞬間が二秒を刻むのだと。

この空間、昔はとても嫌悪感と恐怖感があった。しかし、今は比べ物にならないくらい居心地が良く、無音が響き渡るこの部屋は、恐怖と言う感覚を麻痺させてくれる。純粹で、この社会や世間、人間関係を知らなかったあの頃の僕には残酷過ぎた空間。得体の知れぬ漆黒の渦巻きに飲込まれそうで怖かったし嫌いだ。それでもこの空間は、二十歳を過ぎた僕を反芻しながらゆっくりと飲込んでいった。

醒覚

飲込まれる刹那、僕は数日間もがき、抵抗、反発を続けた。世界が閉じていく感覚、そしてプラスがマイナスへと反転していく感覚。恐怖、孤独、混沌、憂鬱、それらが脳内を駆け巡りシナプスを刺激、やがて麻痺状態にさせ最後に支配していく感覚を覚えた。

抵抗、反発をすればするほどにこの身が切り裂かれ、心は薔薇の棘に締め付けられた様に強烈な痛みが走る。抵抗していたが、触れた。触れるしかなかった。結局僕は恐怖、孤独、混沌、憂鬱を一つ一つ触れてみることで内側にある真実を空間が引き出してくれたのかもしれない。

触れた後には水辺の波紋が広がるかの如く僕を暖かく包み込んでくれた。空間が僕を完全に飲み込んだのだ。

凍てついた心を共感し理解してくれたこの空間。そして、何時しか空間が夢を見はじめ、僕はその中で空間の夢を見ることにより互いを認識し確認することができた。空間の淀みには夢と現実が入り乱れ、まるでシャボン玉の様に浮かんでは消え、消えては浮かんだり。このまま億劫に身を委ね、連続した生と死を断片的な時間列を空間に記憶すれば、戻る事の出来ない懐古に、繰り返し触れることが可能になる。

その代わりに僕は未来を夢見ることが出来なくなった。輝いていた過去を見ることしか今はもう出来ない。全てにおいて夢中になれたあの頃を、この空間でもう一度触れてみよう。デジタルな数字が脳の中枢で激しく回転し始め、交差し、それにより昔の懐かしい場面が格納された部屋の暗証番号を割り出す。

最後にこの空間は取り出された場面を映すスクリーンとなる。過
去の真実。

隔絶

外の世界はどうなっているのだろうか？ふとそんな疑問が頭の中に過ぎった。

この空間に溶け込んだ僕にはもはやどうでもいい疑問だったが、何故か考えてしまった。

あと数秒で僕はこの空間の映し出された映像に同調しなければならぬ。この空間の記憶とともに。

1980年 2月21日 午後6時14分

僕は千葉県の田舎（東京人から見ると確実にそう言われるだろう。）の何の変哲もない町に生まれた。

小学生低学年の頃は人口は少なかったが、中学の頃になると都市や地方からの転居者が増え町から市になった。

それでも、畑や田圃が多く農家中心で、落花生生産地として有名な町である。

有名と言っても今は多分知られていないと思う。昔は日本一の生産高を誇っていたらしいが本当かどうか？そして、田舎を自負してよいくらいにビルなんてものは一つもなかった。あるのは落花生の畑、田圃、古い神社にスーパーが2軒だけの小さな町だった。

幼稚園時代の僕は泣き虫でいじめられっ子でいつも馬鹿にされていて、一度2人に羽交い絞めにされ、もう1人に加速のついたジャンプキックをお腹にうけた僕は床に足から倒れのたうち回った事があった。それでも周りの園児達は見てもぬふりか、にわかには笑っている者ばかり、丁度教室に入ってきた先生も気づかぬふりだった。その日の夜、母に全てを打ち明けると母は泣きながら僕を抱きしめ「強くなるのよ、、、強くなるのよ、、、」とずっと言っていた。

次の日の朝、いつもなら校門まで僕を送り届け家に帰る母だったが教室まで入ってきて先生に説教しはじめた。

怒り狂った母は「あなたそれでも先生なの？ちゃんと1人1人の子供をみてますか！？」と今にも目から火が点く勢이었다。最終的には苛めた3人を僕に謝らせた。その時は「これから仲良くするから。」「ごめんな。」と言っていた3人は母が帰ると一変し笑っていた顔が鬼の形相に変わったのだ。

そしてその日から卒園するまで僕は1人になった、、 隔絶という言葉さえ知らなかった僕でもこの感覚を知ることになった。寂しさ、刹那さ、孤独、、 母の言う「強くなる」の意味は1人でも耐える事なんだと思い始めていた。

隔絶への第一歩だった。

絶目

幼稚園時代、、、

僕の性格の一部が形成し始める。内向的で他人とのふれあいを避け、友達もいなかったあの頃。

家や幼稚園にいるときはいつも心の鍵穴の前でただ呆然と穴を覗いていた。誰も入って来られぬように、、、。今の僕はこの空間でもう一人の僕を鍵穴から覗いている。そう幼少期の僕を覗いている。二十数年前の僕を見つめていると悲惨に思えて涙が止まらなくなった。彼は現在の僕になるべく、時間、分、秒、思考と選択を寸分の狂いもなく生きてくるのだと思うとたまらなく胸が苦しくなる。僕は号泣している。彼を助けられない腹立たしさと哀れみを感じながら、、、

「全ては僕の責任なんだ、、、ごめんな、、、」泣きながら僕は彼に息を押し殺しながら言った。

彼には届くはずが無いのわかっている。この空間に映しだされた昔の僕なのだから。それでも僕は込み上げてくる刹那さを堪えることが出来なかつたのだ。僕と同じ人生を送らせてしまおうという余りにも無常な真実は耐えれなかつた。何としても彼に伝えたい、僕の決めてきた間違つた選択を伝えたくかつた。

人の心には色がある、見渡す限りのマリンスプルの心、太陽の光が降り注ぐ心、不毛な大地に荒れ狂う黒い雲な心
あの頃の僕はどんな心の色をしていたのか、、、

その時考えられない出来事が起こつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728/>

暗転と

2011年10月7日04時01分発行